KANSAI＊OSAKA

文化力

No.139
2023/SPRING・春

関西から文化力
POWER OF CULTURE

アーティストが育つ活気と魅力ある大阪に

・Osaka Directory（大阪中之島美術館プロジェクト）
・アートストリームを弾みに世界へ飛躍 ハタヤママサオさん
・学校アートプログラム（文化芸術による次世代育成事業）

トップインタビュー 企業と文化
角元敬治氏（株式会社三井住友銀行 取締役副会長）

報告 賛助会員さま 事業報告会・交流会
助成事業紹介
日本万国博覧会記念基金
アーツサポート関西
村瀬先生の「ぶらり歴史歩き」大阪・中之島編
日本の文化に親しむ「花の集い」
開催レポート
・ワンコイン文楽
・第8回上方落語若手噺家グランプリ決勝戦
・令和4年度 関西元気文化圏賞 贈呈式 ほか

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会

表紙:ハタヤママサオさん（ポップアーティスト）

アーティストが育つ 活気と魅力ある大阪に

大阪中之島美術館 × 関西・大阪21世紀協会 共同企画

Osaka Directory
おおさか ディレクトリ
supported by RICHARD MILLE

大阪中之島美術館

「文化の担い手を育てる」を行動指針の一つとする関西・大阪21世紀協会は、これまで若手アーティストの作品が市民の目に触れるさまざまな機会をつくり、作家の活動を支援してきました。今年度設立40周年を迎え、大阪中之島美術館と共同で、関西・大阪ゆかりの若手実力アーティストを個展形式で広く紹介する「Osaka Directory＊」を3期にわたり大阪中之島美術館で開催。この取り組みを通して大阪におけるアートシーンが活気づき、国内外から「アーティストが育つ、活気と魅力のある都市」として大阪が認知され、地域の賑わいに貢献することをめざしています。

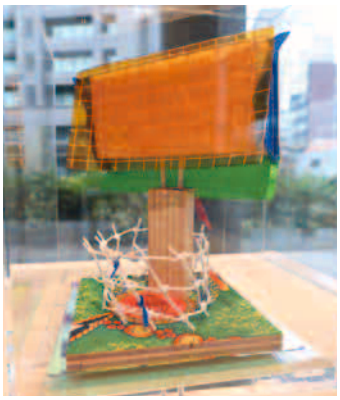
＊Directory…英語で「名鑑」の意。この展覧会を重ねることで、関西ゆかりの「アーティスト名鑑」になればとの思いが込められている。
第1期の赤鹿麻耶展は2022年8～9月に開催。

第２期 2022年11月23日～12月25日

貴志（きし） 真生也（まおや） 「きれい」ではなく「なんだろう？」という感覚

美術作品にはあまり使用されないような素材を使って、今までに見たことのない景色を作り出す貴志真生也さん。Osaka Directoryでは、人の背丈を越えるものから手のひらに乗るものまで、新作6点を含めた大小11点のインスタレーション作品が展示されました。発泡スチロールや角材、ビニールシートなどの素材（工業製品や資材）をそのまま用いた作品は、その素材が新たな存在感を放ち、驚きや疑問、困惑など観る人のさまざまな感情を呼び起こしました。

その中の一つ《ミラーボールの塔》は、主役とその裏側にあるものとが組み合わさったらどう見えるか、という発想から生まれた作品。角材やワイヤーなどで組んだ架台に自転するミラーボールが天秤状に吊るされ、煌めくミラーボールとそれを支える無骨な架台の両方が目に入ることで、華やかな世界を支える裏側の存在を実感させるようでした。


《良い素材集＃4》2022年
発泡スチロール、ブルーシート、トラックシート、ビニールシート、キャンバス生地、割り箸、角材、合板、ネット、ビニールタイ、布、アクリルケース〈高さ約30cm〉

「観た瞬間に “きれい” ではなく “なんだろう？” という感覚が生まれることを期待している」という貴志さん。

《ミラーボールの塔》2022年
角材、合板、ミラーボール、ワイヤー、金具、ミラーボール用モーター、結束バンド〈高さ約2.5m〉

初日に行われたアーティストトークでは、「世の中にはまだまだ分からないものがあり、新しい見え方をするものがあることを感じていただければうれしい。“きれい” や “汚い” だけで割り切れない混沌とした世界を作品に投影したい」と語りました。

作品解説をする貴志真生也さんと来場者（2022年11月23日/アーティストトークにて）

プロフィール
1986年大阪府生まれ。2009年京都市立芸術大学彫刻専攻卒業。看板、建物、社会といった、人によってつくられた環境をモチーフとし、その意味を問い直す作品を制作。発泡スチロール、角材、ブルーシートなどの工業資材を見立てによって作品とする。素材は規格そのままに、作家の手の痕跡を残さないよう意識して、不要な意味を排除したシンプルな形態へと落とし込んでいる。これまで東京、京都、神戸などで個展を開催。2011年にはメゾン・エルメスのウィンドウディスプレイを手がけた。

第３期　2023年1月20日～2月26日

遠藤 薫（えんどう かおり）　美しいものの背後にある人々の営み

工芸の美しさに加え、それが作り出された時代背景や人々の暮らしを、インスタレーション手法を用いて表現する遠藤薫さん。作品《重力と虹霓（こうげい）／南波照間島について》は、沖縄に伝わる「南波照間島（パイパティローマ）伝説」を中心に、南西諸島で古くから使われた丸木舟を制作し、糸芭蕉（バナナの一種）の繊維で織り上げた芭蕉布を帆に仕立て作品化したものです。

茶色の帆は米軍嘉手納基地とフィリピンのバナナの繊維で織られ、緑色の帆は1964年の米軍払い下げパラシュートを再利用して作られた。丸木舟（杉・全長約５m）は石垣島で船大工を営む吉田友厚さんが製作。

南波照間島は、日本最南端の波照間島（はてるまじま）のさらに南にあるとされる想像上の島。かつて薩摩藩支配下の琉球王府で厳しい人頭税を課せられた波照間島の島民は、その徴収から逃れるため、役人が乗ってきた舟を盗んで黒潮を南下し、南波照間島にたどり着いたといわれています。遠藤さんは作品を通して、そのような物語を語り継がなければならなかった島民の暮らしぶりについて思考を巡らせています。

また、沖縄の工芸には戦争や基地につながるものもあります。例えば「琉球ガラス」は、1945年の地上戦の際に米兵が飲み捨てたコーラの空き瓶を溶かして作り直したのが始まりとされ、黒糖や籾殻などを混ぜ入れて、あえて泡を立たせた美しさが特徴です。

帆の芭蕉布は、遠藤さん自身が米軍嘉手納基地の黙認耕作地に生えるバナナを採取し織り上げました。「美しい事物の創造に必ずしも過酷な環境が必要だとは思わないが、意識するしないにかかわらず、人々の抵抗と無抵抗の形が美しさとして現れる」という遠藤さん。作品には、そうした人々の痛切な生の跡をなぞることで、そこに虹が立ち上がることを願う思いが込められています。

コーラ瓶の再生ガラスについて説明する遠藤薫さん（2023年１月21日／アーティストトークにて）

プロフィール
1989年大阪府生まれ。2013年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016年志村ふくみ（紬織、重要無形文化財保持者）主宰アルスシムラ卒業。沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係性を紐解き、主に染織技法を用いて制作発表を続けている。雑巾や落下傘、船の帆などを制作し、「使う」ことで布の生と人々の生を自身の身体を用いてパフォーマティブにトレースし、工芸の本質を拡張することを制作の核とする。東京や沖縄などで個展を開催。「第13回 shiseido art egg」ではart egg賞を受賞。

大阪中之島美術館
大阪市北区中之島4-3-1
2022年2月2日開館。地上5階建ての館内に、モディリアーニや佐伯祐三など国内有数の近代・現代美術作品6,000点以上を所蔵。今年4月15日～6月25日に開館1周年記念特別展「佐伯祐三 ―自画像としての風景」を開催。

『ぱんだの
ぬいぐるみ』

アートストリームを弾みに世界へ飛躍

ポップアーティスト

ハタヤママサオさん

1976年大阪府出身。会社員時代の2004年から本格的にアート活動を開始。独創的な色彩感覚で、独自の "Japanese Pop Art" を表現。パリを中心に海外での個展や国内外のアートプロジェクトを展開する一方、官公庁や企業コラボなど活動は多岐にわたる。2010年UCCコーヒー〈コーヒーアート大賞〉佳作、2013年、2015年アートストリーム〈企業・ギャラリー賞〉受賞。

関西・大阪21世紀協会は、2003年から2019年まで、新進アーティストに作品発表の場と業界関係者との出会いの機会を提供する「アートストリーム」を開催してきた。ハタヤママサオさんは、これを弾みに活躍の場をさらに広げ、念願の「パリ個展」も実現。絵を描く楽しさがほとばしる独創的な色彩感覚で、今や国内外で多くのアートファンを楽しませている。

遠かった「憧れの場」

ハタヤマさんがアートストリームに初めて出展したのは2008年、32歳のとき。それまでは描き貯めた絵をポストカードやバッジなどに加工して各地のアートイベントに参加したり、知り合いに頼んでカフェに置いてもらったりしていた。路上販売時代は、1日かけてポストカード1枚（150円）しか売れなかったこともある。SNSが普及していなかった当時、ハタヤマさんにとって大勢の人が集まるアートストリームに参加することは、唯一かつ最大のアピール方法だった。

路上販売時代

「ギャラリー（画商）に所属せず、美大卒じゃない素人同然の私でも参加でき、しかもプロのアーティストや業界の方々に評価していただけるのはアートストリームしかありませんでした。路上と違って壁（専用ブース）があるのも嬉しかったですね。何より、ここで受賞すれば仕事のオファーも受けられる。私には憧れの場だったし、大きなチャンスでした」

アートストリームにて（2013年11月）

しかし初出展の2008年は受賞を逃した。それどころか2012年まで公募審査に落選し続け、出展すら叶わない。この間、大手百貨店のビジュアルデザインを手がけたりカフェで個展を行ったりして少しずつ活動の幅を広げていったが、毎年、アートストリームに出展できない悔しさを味わった。アートストリームは出展希望者が多く、作家のレベルも高いうえ選考も厳しい。だから5年後の2013年に2度目の出展を果たし、企業・ギャラリー賞（大阪水上バス賞、関西・大阪21世紀協会賞）をダブル受賞した喜びは格別だった。

二足のわらじ

「パリやニューヨークで個展をしたい。そして世界で通用するアーティストになりたい」

当時、ハタヤマさんは受賞の喜びを聞かれてそう語っていた。とはいえ海外展開のあてやプランは何もなく、「完全に夢でした」と振り返る。当時は一般企業に勤める営業マンで、アート活動は休日のみ。平日は帰宅してから明け方近くまで絵を描くこともあり、土日を中心に東京や大阪

『夢見るパリ』

のアートイベントに出展していた。サラリーマンをしながらアーティストと名乗るのは気が引けたが、続けるうちにファンが増え、原画がほしいという人も出てきた。しかし、それでも会社を辞めるつもりは全くなかった。

就職氷河期に大学を卒業したハタヤマさんは、起業家を目指して販売系のビジネスを興すが失敗。睡眠時間を削っていくつものアルバイトを掛け持ちする日々を送っていた。初めて正社員として企業に就職したのは28歳のとき。アート活動を始めたのは、大好きな絵で自分の可能性を試すためと小遣い稼ぎだったという。以後、二足のわらじを続け、アートストリームに出展した2013年は37歳。受賞は大きな励みになったが、結婚して一児の父親になり、二度と独身時代のような不安定な生活には戻りたくないという思いが強かった。

しかしその3年後、転機が訪れた。フランスを代表するアートフェア『サロン・アート・ショッピング・パリ』に作品を送り、世界の反応を見てみないかと誘われたのである。

パリでの直感

会場はルーヴル美術館の地下サロン『カルーゼル・ドゥ・ルーヴル』。有名なファッションショー『パリコレ』の開催場所でもある。ハタヤマさんは、どうせなら世界のアート市場を自分の目で確かめたいと、2016年10月、有給休暇をとって憧れのパリ行きを決行した。

アートストリームの数倍はありそうな広さの会場には、世界各国からアーティストや美術関係者、メディア、アートファンが大勢詰めかけていた。そこで感じたのは、想像とは違う意外なものだった。

「世界中からアーティストがやってくるんだから、自分に似たタッチの作家も当然いるだろうと思っていました。でも全部見て回ったところ、自分と被っている作品がない。これなら自分の力でもイケるんじゃないかって直感したんです」

アーティストの未来へ向けた活動を応援
アートストリーム

大阪・関西を拠点に活動するアーティストに、発表の場と業界関係者とのマッチングの機会を提供する展覧会・マーケット。大阪が感性豊かな創造者が集う都市となるには、文化創造の主役たる人を積極的に受け入れ、支える仕組みを作ることが必要であるとの考えから、2003年から2019年まで開催された。主催はアートストリーム実行委員会（大阪芸術大学、大阪府、大阪市、関西・大阪21世紀協会）。湊町リバープレイス、サントリーミュージアム［天保山］、大丸心斎橋店で開催され、出展者は一般公募し選考を経て決定。選考を前提にすることで、参加すること自体がアーティストの目的となり、参加意義を明確にした。直近5年間は毎回約90組が出展。海外アーティストも参加するなど、大規模なアートマーケットとして注目された。

大丸心斎橋店での開催風景（2019年）

『サロン・アート・ショッピング・パリ』には大勢のアーティストが参加しているものの、作家の実力や作品のレベルはさまざま。初参加のハタヤマさんはそれをよく知らず、「（イケると直感したのは）大きな勘違い。でも、これでスイッチが入った」という。

活動を海外に広げるとなると、サラリーマンをしながらでは難しい。現に国内ですら依頼に応えるのが精一杯で、制作時間が足りずに納得いくまで作り込めないときもあり、ファンに申し訳ないという思いも募っていた。このとき40歳。「アートで勝負するなら今しかない」と、13年勤めた会社を辞めて独立する決心をした。

大阪ならではの風景

パリでスイッチが入って1年後の2017年、大阪府大東市にアトリエ兼ショップを構え、名実ともに“ポップアーティスト・ハタヤママサオ” としてスタートした。そして最初の依頼が、大阪水上バス株式会社が運行する『アクアライナー』を全面ペイントするという大仕事。きっかけは同社の幹部が水上バスを描いたハタヤマさんのステッカーを見て、実際に走らせたら面白いと思ったことだった。アクアライナーは大川の大阪城港～中之島間を周遊する全長約30mのクルーズ船で、こうした船にアートを施すのは日本初だった。

ギャラリーショップ（6階）のあるビルに描かれた『HOPETREE』
（大阪市中央区西心斎橋1-13-1 おおきにHOPETREE心斎橋）

「新たな人生の船出に船をペイントするって、幸先の良い最高の仕事だと思いました。夏の炎天下で1週間、気合が入っていたので全然辛くありませんでした」

大阪水上バス『ハタポップライナー』

この船は『ハタポップライナー』の愛称で親しまれ、大阪ならではの風景の一つとして観光ガイド本にも紹介されている。そして、これを機に大阪梅田ロフト（大阪市北区）や千島団地（同大正区）など、ミューラルアート（壁画）の依頼も増えた。

「僕の作品の前で記念撮影をしている人を見ると嬉しいですね。ミューラルアートを見てショップに来られる人もいて、良い宣伝にもなっています」

アートを始めたときから多くの人の目に触れることを念頭に置いているため、グッズであれ、ミューラルアートであれ、向き合う思いは同じだという。

海外活動への思い

独立して1年後、ハタヤマさんはついに念願のパリ個展を実現した。さらにその翌年にはニューヨークのアートマーケットに参加して完売。作品が台湾の蔡英文総統への贈答品に採用されたり、2025年大阪・関西万博のカウントダウンイベントや堺百舌鳥古市古墳群世界遺産登録記念での作品を制作したり、東南アジアの恵まれない地域に学校や井戸を造るチャリティーオークションで原画が落札されるなど、活動は多岐にわたりメディアにも度々取り上げられた。2020年にはショップを大阪心斎橋に移転。そのビルをミューラルアート『HOPETREE（希望の樹）』で埋め尽くして話題になった。

原画が売れると、それを元手に海外活動に弾みがついた。現在、ニューヨークやバルセロナ、ミラノ、ドバイでの個展やアートフェアへの出展が決定しており、着々と海外進出の地歩を築いている。

パリ初個展「ARTISTE POP JAPONAIS」にて（2018年10月）

「おかげさまで国内ではいろんな企業からの依頼が増えました。次はその世界版をやりたいんです。例えば世界的に有名なブランドとコラボして、自分のファンを世界に広げたい。世界で今どんなアートが求められているのか知るために自ら現地に出向いて、海外でやっていく肌感覚を養いたいと思っています」

いずれは海外拠点を持ちたいというハタヤマさん。海外での個展開催は準備の手間や費用がかかるが、今は自分への投資のつもりだという。

ポップアートで世界をHAPPYに

2022年2月、ハタヤマさんは自身の半生を綴った『ポップアートで世界をHAPPYにする男』を上梓した。その帯には「どん底だった男がどうしてパリで個展をするまでになれたのか!?」とある。路上販売からアートストリームでの受賞を経て現在にいたる活動は順調そのものに見えるが、「実はうまくいくように実行していることや心がけていることがあるから」だという。それは、数々の失敗や成功に学び、依頼者の思いを汲んで誠実に仕事に取り組む姿勢にほかならない。

『ポップアートで世界をHAPPYにする男』
トキツカゼ出版
（B6版・163頁／インターネットで販売）

「ハタヤママサオをもう一人の自分がプロデュースしている感覚が常にあります」

現在、SNSやYouTubeを駆使して、自身の活動を積極的に発信している。パリでの勘違いを正解に変えたのは、そうしたセルフプロデュースに加え、会社員時代に培ったビジネス感覚があってこそだろう。ショップには、原画のほかに作品をプリントした小物やアートボックスも多くある。最近は作品（原画の複製）のレンタル、いわばアートのサブスクもはじめた。

「原画を買うとなるとハードルが高いですが、普段使っているものをちょっと華やかにしたり、身の回りをカラフルにしたりできるのは、ポップアートならではの楽しみ方。僕の作品で少しでも日常が明るくなり、元気な気持ちになってもらえれば嬉しい」

著書では、アーティストにとって一番必要なことは「人の心を揺さぶる作品を生み出せているかどうかを常にチェックして、そういう作品を生み出すために日々邁進すること」と述べている。ポップアートで世界をHAPPYにする原動力がここにある。

（写真提供・ハタヤママサオさん）

2022年11月28日／大阪心斎橋・hataPOPgallerySHOPにて
（ライター 三上祥弘）

2022年度

学校アートプログラム

（文化芸術による次世代育成事業）

アーティストが育つ 活気と魅力ある大阪に

関西・大阪21世紀協会が2021年度より実施している「学校アートプログラム」。本事業は小学校にアーティストを派遣して行う体験授業で、子どもたちがアーティストと触れ合うことで創造性を育み、心豊かな成長を促すとともに、関西・大阪の文化芸術の活性化を図ることを目的としています。2年目である2022年度においては、昨年度実施プログラムから内容を一新して実施するとともに、既存の枠組みを活用した新たな取り組みを展開していきます。

泉南市立新家小学校５年生

廃材を使って守り神を作ろう

●講師：石田真也

事前に集めた廃材で各自が「自分の守り神の顔」を制作。それをつなぎ合わせてグループの守り神を作り、最後はクラス全体の守り神に仕上げて教室に展示しました。守り神をつなぎ合わせる人、装飾を考える人、クラスの神様の名前を考えて看板を作る人など、役割を分担して作業しました。

泉南市立東小学校５年生

南アフリカの音楽とアート体験

●講師：ンコシ・アフリカ

ジェンベでオリジナル曲を作ったほか、南アフリカの少数民族ンデベレ族のアートを体験しました。３日間の最終日は、オリジナル曲やアート作品、自分たちで調べた南アフリカの生活や文化を全児童に向けて発表しました。

阪南市立朝日小学校３年生・岬町立深日小学校４年生

南アフリカの音楽体験

●講師：ンコシ・アフリカ

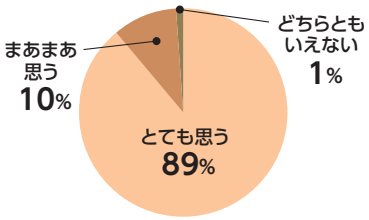
アフリカの太鼓・ジェンベの基本的な奏法を教えてもらった後、朝日小学校はクラスごとに、深日小学校はグループごとに分かれ、自分たちで考えたオリジナル曲を制作。それを発表会で演奏し、出来栄えを披露しました。

南アフリカとオンラインでつなぎました

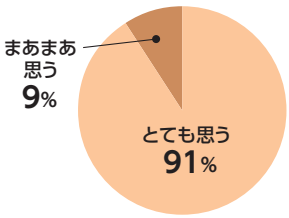
東小学校、朝日小学校、深日小学校の３校では、南アフリカ共和国の公認サファリガイドである太田ゆかさんとオンラインでつなぎ、現地の野生動物の様子や絶滅が危惧されるサイの保護についてお話を聞きました。

●アンケート結果

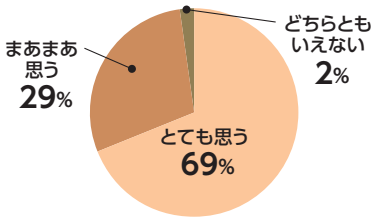
「またやってみたいと思った」



「アーティストと一緒に活動できて、普段とは違う体験ができた」



「表現することが楽しくなった」



アンケートより抜粋

参加児童の感想

「廃材を使って守り神を作ろう」

- みんなからいっぱい意見が出てきて、みんな考えが自由ですごいなと思いました。
- 廃材でアートを作るのは見たことも聞いたこともなくて、新鮮な気持ちになりました。

「南アフリカの音楽体験」

- ワークショップのおかげで世界、音楽、アートの幅がとても広がりました。
- 角をとるためにサイを殺すのはひどい。密猟の話を友だちや家族に教えようと思いました。

教員の感想

- 何でもそつなくこなす児童が「難しいからこそ面白い」と夢中になっていました。
- あまり表現することのない児童が、リズムに乗ってソロ演奏にも挑戦していました。
- いろいろな意見を聞き入れよう、取り入れようとしている姿が見られました。
- アーティストの児童への接し方に触れ、教員自身も新しい発見がありました。
- 自らが新しい芸術表現を知るきっかけになりました。

講師（アーティスト）プロフィール

石田 真也さん

「見えない力」をテーマに、国内外の訪問地で集めた廃品や漂着物、不要となった物を素材として立体作品を制作。物が生まれてからなくなるまでのサイクルに介入することで、物の新たな可能性を追求する。

ンコシ・アフリカ

アフリカンパーカッションの演奏や絵画制作などを行う南アフリカ共和国出身のアーティスト・Joseph Nkosi（ジョセフ・ンコシ）さん（写真上）と、大阪府出身のマリンバ奏者・河辺知美さん（同下）によるアフリカン音楽のユニット。

学生スタッフの声

永田 日向生（ひなお）さん

大阪教育大学 教員養成課程 中等教育専攻
美術・書道コース（美術）

芸術に気づく最初の一歩

「学校アートプログラム」を実際に見ることができたのは、本当に貴重な機会となりました。音楽や美術（図工）を通して世界の様々な文化に触れることは、芸術を教科として好きではない子でも、「あ、これも音楽なんだ」「これも美術なんだ」と気づくことができる、最初の一歩になると思いました。また、来春（令和５年４月）から美術教員になる立場として、普段の授業だけではなく、アーティストの方々に学校へ来ていただくことや、子どもたちが学校の外で実際に見るという重要性を強く感じました。それと同時に、子どもたちが楽器に触ったり作品を作ったりして楽しそうにしているところを目にして、アート普及のために学校でできることはまだまだあるのではないかと、希望を持つことができました。

中野 真希さん

大阪教育大学 大学院連合教職実践研究科
高度教職開発専攻

教師も児童と一緒になって楽しむ

朝日小学校と深日小学校で「アフリカの音楽体験」授業を見学しました。最初は太鼓を一人でたたくことに自信がなかった子も、授業の最後には自分なりのリズムをつかみ、楽しむことができていました。仲間と一緒に作品を作ることが、生き生きした学びにつながっていることがよく分かりました。新家小学校での「廃材を使った守り神作り」では、私自身、「ゴミから作品を作る」という経験はほとんどなく、海から流れ着く物をじっくり見て、新たな物に作り替える作業は、非常に印象的でした。子どもたちにとっても、新鮮な体験になったと思います。また、子どもたちと一緒に楽しみながら学びを深めようとする先生の姿を見て、私が目指す教師像にも結び付く部分を感じ、私自身も学びを深めることができました。

今年度の新たな取り組み

阪南市の海洋教育にプログラムを提供

学校アートプログラムでは、基本的な枠組みを活用して他の団体にショートプログラムを提供するなど、さらなる取り組みを拡大しています。今年度は、阪南市が展開している「豊かな地域資源を活用し地域が支えあう持続可能な協働・共創のまちづくり」を目指す海洋教育において、その枠組みを活用し、小学校３校にプログラムを提供しました。朝日小学校・桃の木台小学校においては、「石図鑑づくり」を、東鳥取小学校においては、「OHP（オーバー・ヘッド・プロジェクター）を使って風景を表現」をそれぞれ実施しました。

地元ご協力企業の声

東野 泰希さん

和泉チエン株式会社
経営企画Gr直属グループ

思いがけない気づきやエネルギーを得る

本プログラムを通じ、子どもたちの豊かな発想力、感性、そして笑顔に触れることができ、当社としても思いがけない気づきや前向きなエネルギーを受け取ることができました。普段の学校生活では関わることがない人たちとの出会いや経験は、将来記憶に明確には残らずとも、個々人の心のどこかで宿り続け、人格を形成する大事な要素になると信じております。未来ある人材の育成のために、今後とも微力ながらサポートできれば嬉しいです。

大阪中之島美術館 菅谷館長が講演
「さまざまな視点を知り、豊かな美術体験を得てほしい」

菅谷富夫館長と講演風景

崎元利樹理事長

関西・大阪21世紀協会は、賛助会員の皆さまに当協会の事業活動について一層ご理解を深めていただくため、大阪中之島美術館において事業報告会を実施しました。当日は、皆さまの日頃のご支援に感謝し、館長の菅谷富夫氏による講演会も開催。また、同館との共同企画「協会設立40周年記念事業・Osaka Directory」や展覧会「ロートレックとミュシャ パリ時代の10年」をご覧いただきました。

人々の心に文化の灯をともし、育んでいきたい

冒頭、挨拶に立った当協会の崎元利樹理事長は「今年度設立40周年を迎えた当協会は、2009年に大阪府・市からの出向や財政的支援が無くなって以降、経済界や市民の皆さまに支えられて活動を続けてきた。この間、組織としては小さくなったが、上方文化芸能協会の活動や日本万国博覧会記念基金事業の承継、『アーツサポート関西』事業の推進など、取り組む分野は広がってきた。今後も芸術・文化を媒介として諸団体との橋渡し役を担い、人々の心に文化の灯をともし、それを育んでいきたい」と呼びかけました。続いて大西晃専務理事が、当協会40年の歩みをはじめ、今年度からスタートした第5次グランドデザイン（中期計画）の行動指針や今後の活動について説明。その後、大阪中之島美術館の菅谷富夫館長が『大阪中之島美術館と大阪美術の発信』をテーマに講演を行いました。

菅谷氏は講演で、大阪発祥の美術作品について紹介。江戸時代から明治時代にかけて、儒学者や医者、武士、商人ら教養人が描いた「文人画」をはじめ、昭和初期に裕福な市民層が「浪華写真倶楽部」などのグループを作って前衛的な写真作品を発表していたこと、吉原治良をリーダーとする前衛美術グループ「具体美術協会（1954～1972年）」の活動などを紹介しつつ、当時、それらが高く評価されなかったのは、アマチュアが独学で制作したものであるがゆえに、アカデミズムの視点による美術史に位置付けられていなかったためと解説しました。また、それらの大阪にあるさまざまな美術作品を同館で展示するのは、大阪の自慢をするためではなく、東京発の美術ジャーナリズムやアカデミズムが示してきた美術史とは異なる多様な視点を知ることで、来場者に豊かな美術体験を得ていただくためと強調。今後もそうした視点による展覧会を開催していきたいと語りました。

講演終了後は別会場にて、賛助会員さま相互の交流会を実施しました。

開催中のOsaka Directory 2（貴志真生也展）を鑑賞する賛助会員さま

トップインタビュー
企業と文化

株式会社 三井住友銀行
取締役副会長
角元 敬治氏
かくもと けいじ

持続可能な社会の実現に向け 社会課題の解決をサポート

「企業は社会の公器」という事業精神を江戸時代から受け継ぎ、日本そして世界の経済活動の基盤となる金融インフラを担う三井住友銀行。コロナ禍や戦争など、世界規模でさまざまな困難に直面する今、その事業精神は、SDGsに代表される社会課題の解決や文化支援にも貫かれている。そうした思いについて、当協会理事長の﨑元利樹が伺った。

激動の2022年を振り返って

﨑元　2022年は、長引くコロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻によって、経済界はもとより御行の活動にも大きな影響がおありだったと思います。この状況をどのように見ておられますか。

角元　新型コロナの感染者数は依然多いものの、「5類」への移行の議論が始まり、世界的にもウィズコロナ、アフターコロナ路線が定着し、ようやく出口が見えつつあると思います。一方、ロシアによるウクライナ侵攻に端を発して、地政学的リスク*と捉えていたことが現実化しました。経済面では、エネルギー・資源価格の高騰に、日米の金利差などを背景とした円安による輸入品の価格上昇が相まって、コストアップに伴うインフレが発生し、企業活動のみならず国民の暮らしを圧迫しています。

輸出型の大企業を中心に業績堅調な企業がある一方、中小企業を中心に原材料価格の高騰を価格に転嫁できず苦境に陥る企業との二極化が進んでいます。堅調な企業には、人材への投資を含めた積極的な投資を進めてもらいたいですし、取引先からのコスト増加による適切な範囲での値上げ要請に対して企業が前向きに対応していくことも、サプライチェーン*のサステナビリティ（持続可能性）を確保する観点で重要です。

そうした社会の変化にお客さまが適合するためのサポートがわれわれ銀行の仕事です。そのため、社会の変化に応じて、われわれの仕事の幅や内容も変化していきます。

＊地政学的リスク…特定の地域が抱える政治的・軍事的な緊張が、地理的な位置関係により、その地域や関連地域、世界経済全体の先行きを不透明にするリスク。
＊サプライチェーン…商品や製品が消費者の手元に届くまでの、調達、製造、在庫管理、配送、販売、消費といった一連の流れ。

経営理念を見直し

﨑元　御行は2020年、経営理念を「社会課題の解決へ事業を通じて貢献する」という観点で見直されました。これはどのようなお考えからでしょうか。

角元　私どもには住友と三井の両グループの歴史がベースにあります。また、社会インフラを担う金融機関としての役割を全うすることが社会貢献につながるという考えは昔から変わりません。ただ近年、企業における社会貢献は、事業に加えての「プラスα」という考えから、事業活動そのものを通じて社会課題の解決に貢献するという考えに変容していると感じます。地球環境保護や人類の幸福などに寄与することが企業の存在意義だとされています。そして、それを意識した組織運営をしなければ、ステークホルダーから支持されない状況にあります。

弊行グループは、これまで「お客さま」、「株主」、「従業員」の三者を重要なステークホルダーと捉え、経営理念を掲げてきました。2022年４月、「社会」をステークホルダーとして明確化し、経営理念に「社会課題の解決を通じ、持続可能な社会の実現に貢献する」を加えました。

住友グループ

「自利利他 公私一如」。自分だけの利益を目的とせず、社会と利益を分かち合い、社会と住友は一体との意味。江戸時代、住友は銀の海外流出を防ぐため、「南蛮吹」の技術を銅の精錬業者に公開し、近代では大阪府に図書館などを寄付した。戦後もこの精神はグループに引き継がれている。

三井グループ

江戸時代、呉服商として当時の商習慣にイノベーションをもたらし、江戸町民のコミュニティに根付く新たなビジネスモデルを確立。江戸時代には業界屈指の両替商として、明治以降は銀行として、３世紀余り日本そして世界の経済活動の基盤となる金融インフラの重要な担い手となってきた。

お客さまの取り組みを後押し

﨑元　事業を通じて、どのような社会貢献活動を行っておられますか。

角元　一例として弊行の取り組みをご紹介すると、脱炭素化に向けて2022年４月、弊行の本店など４本部ビルで使用する全ての電力を、太陽光発電などの再生可能エネルギーに転換しました。また、弊行自身の取り組みもさることながら、お客さまの脱炭素化への取り組みを後押しすることの重要性が増しています。自動車業界であれば、電気自動車や水素自動車へのシフトに伴って、事業転換を迫られることが想定されます。そのための直接的な金融ニーズにお応えすることはもとより、環境問題への取り組みを後押しするご提案なども行っています。

﨑元　社会課題としてのテーマの一つとして、子どもたちへの金融教育も行っておられますね。

角元　私たちの世代は、子ども時代に「金融」について教わってきませんでした。一方、諸外国とりわけアメリカでは、早くから子どもへの金融教育が行われていて、日本人に比べて投資に対する抵抗感も小さい。

最近は日本でも、国が「貯蓄から投資へ」という流れを作るべく、金融教育の旗を振っています。こうした中でわれわれは、グループ各社が持つ知識やノウハウを生かした金融経済教育の活動を、小・中・高校・大学生を中心に幅広い世代に向けて提供しています。このプログラムでは金融の持つさまざまな働きを理解してもらうだけではなく、自身で生計を立てることや資金計画を考えることで得られる「自立する力」や、労働や消費を通して身に付く「社会とかかわる力」を養うことを目的としています。金融に携わる者として、こうした「生きる力」を養う教育の提供も社会貢献につながると考えています。

聞き手　**﨑元 利樹**
公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 理事長

文化・芸術活動を支援

﨑元　文化・芸術活動にもさまざまなご支援をしておられますね。

角元　1982年に中之島の大阪市立東洋陶磁美術館ができた際、住友グループは大きな役割を果たしました。同美術館のコレクションは、もともと総合商社の安宅産業が収集していたところ、同社が経営危機に陥り他社に合併された際、その後処理のために散逸する危機に陥りました。これを受け、住友グループ21社の寄付を原資に、大阪市がコレクションを一括して入手したことで大阪市立東洋陶磁美術館が誕生しました。世界でも数少ない東洋陶磁の専門美術館で、大変貴重な文化遺産が守られたことが賞賛されました。

大阪市立東洋陶磁美術館（1982年開館／大阪市北区）
国宝２点、国の重要文化財13点を含む約6,000点を収蔵

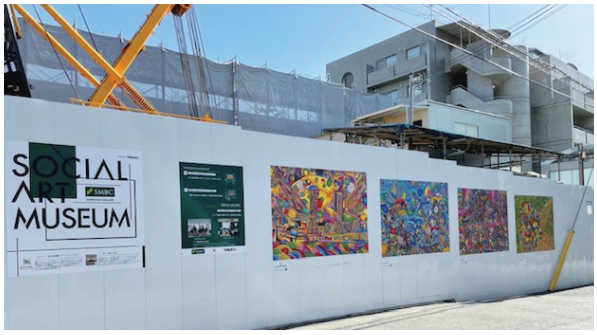
「大阪クラシック」開催風景（2022年９月／三井住友銀行大阪本店ビルにて）

また、1947年に創設された大阪フィルハーモニー交響楽団（当時は関西交響楽団）は、大阪銀行（後の住友銀行）の鈴木剛社長が初代理事長として運営団体の社団法人化に尽力しました。以来、弊行のほか関西経済界が楽団の活動をサポートし、現在は弊行グループ・三井住友フィナンシャルグループの奥正之名誉顧問が理事長を務めています。

こうしたご縁もあって、弊行は、大阪の秋を彩るクラシックの祭典「大阪クラシック」に参画しています。このイベントは、御堂筋と中之島エリアを中心にオフィスビルのロビーやホテルなどを会場として１週間にわたり開催される小規模編成のコンサートで、弊行は2015年から大阪本店ビルの１階を演奏会場として提供しています。大阪本店ビルは昭和初期に建てられた歴史的価値の高い建物です。天井のステンドグラスは建築当時のもので、来場者からは「綺麗なステンドグラスと素晴らしい音楽を同時に楽しむことができる」と好評です。

﨑元　御行の住吉寮（神戸市東灘区）の建て替えに際して、工事用の仮囲いに障がい者によるアート作品を展示されたと伺いました。

角元　「仮囲いアートプロジェクト」という活動です。きっかけは、弊行拠点の建て替えなど近隣にご迷惑をおかけする工事現場で、地域貢献や社会課題の解決につながる取り組みができないか模索していた際、弊行の社内SNSに「社会貢献の一環として障がい者アートに協力できないか」という意見が投稿されたことでした。工事現場に設置される仮囲いに障がい者アートを展示する活動を展開していた会社とのご縁もあり、住吉寮の建て替え工事現場で試行しました。これは、SDGsが目指す17の目標のうち「働きがいも経済成長も」「産業と技術革新の基盤を作ろう」「人や国の不平等をなくそう」の三つを達成するための施策で、弊行の経営理念の一つである「社会課題の解決を通じ、持続可能な社会の実現に貢献する」にも合致した取り組みです。



「仮囲いアートプロジェクト」
（2022年４月／三井住友銀行住吉寮〈神戸市東灘区〉）

文化とイノベーション

﨑元　アートといえば、代表幹事を務めておられる関西経済同友会のコーポレート・アート・コレクション『なにわの企業が集めた絵画の物語』展にも参画されていますね。

角元　2018年の第１回開催から、弊行所蔵の絵画を貸し出しています。企業所有の文化芸術作品を公開することで、大阪・関西の都市の価値を高めるとともに、次世代を担う子どもたちの感性を育む一助になればと思っています。

﨑元　その中で行われる「体験型教育」は、有意義な取り組みだと思います。当協会も次世代育成の観点から、小学生を対象とした「学校アートプログラム」を行っています。

「なにわの企業が集めた絵画の物語」展での体験型教育
（対話型鑑賞プログラム）（2018年10月／堂島リバーフォーラム）

角元　それは良い活動ですね。かつてはSTEM教育（Science〈科学〉、Technology〈技術〉、Engineering〈工学・ものづくり〉、Mathematics〈数学〉）が提唱されていましたが、今では発想力を重視する観点で、A（Art〈芸術〉）を加えた「STEAM教育」へと発展しています。関西経済同友会でも2021年に「文化の力委員会」が、「従来、芸術文化は保護・支援される対象とされがちであったが、今や文化の力はイノベーションを促進し社会を牽引する存在へと転換しつつある」と提言しました。右脳を刺激して“ひらめき”を得ることは、イノベーションを生む上でも重要ですね。

　そうした意味でも、2022年に大阪中之島美術館が開館するなど着実に文化振興の芽が出つつある大阪において、関西・大阪21世紀協会に対する期待も高まっていくでしょう。

2025年万博と関西の連携

﨑元　2025年大阪・関西万博については、どのような期待をお持ちでしょうか。

角元　「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマは、コロナ禍前に掲げられたものですが、今後よりその意味は深まっていくと思います。今回の万博が社会課題の解決につながるような、イノベーションの契機となるよう期待しています。そのためにも特に若者に参画してもらいたい。来場してもらうのはもちろん、運営などに主体的に参画してもらうことも重要です。そのためには大学と連携し、学生を巻き込んでいくことも一案だと思います。

　先般、アメリカの大学を訪問する機会があり、そこでは、我々が万博で目指す「世界の多様な文化・価値観が交流し、新たなつながり、創造が促進される」という世界観がすでに体現されていると痛感しました。万博はこうした体験ができる場ですが、一過性のイベントで終わらせるのではなく、万博を機に蓄積された、ダイバーシティに配慮したハード・ソフト面でのノウハウを、関西だけではなく日本全体にいかに根付かせるかが重要です。

﨑元　関西経済同友会では、「関西の連携」ということを打ち出しておられます。これはどのような思いからでしょうか。

角元　例えば少子高齢化など、関西は東京より先にさまざまな問題が顕在化しており、社会課題の先進地域だといえます。関西は全体として見れば、東京都をはるかに凌ぐ人口約2,000万人を擁する地域です。京阪神を含め関西が一体となってベンチャーのエコシステムを作ったり、社会課題に取り組んだりすることで、日本全体の課題解決にもつながると思います。関西から日本を変革するという気概で課題解決に向けて取り組んでいきたいと思います。大阪にしろ、京都にしろ、長い歴史に培われたレジリエンス（困難や変化に対する適応能力）に長けたところですから、一体となれば大きなパワーになるでしょう。

﨑元　おっしゃるとおりです。2025年万博を一つの節目にして、大阪・関西が力を合わせて最大限のパワーを発揮できればと思います。本日は貴重なお話をありがとうございました。

（2022年12月28日／三井住友銀行　大阪本店にて）

角元敬治氏
1962年徳島県出身。1985年神戸大学法学部卒業、同年株式会社住友銀行（現三井住友銀行）入行。同執行役員、取締役兼専務執行役員などを経て、2022年より現職ならびに一般社団法人関西経済同友会 代表幹事。

株式会社三井住友銀行
本店：東京都千代田区丸の内一丁目１番２号。資本金１兆7,709億円。株主・株式会社三井住友フィナンシャルグループ100％、従業員数28,012人、国内本支店数455か所、海外支店10か所。（2022年９月30日現在）

（写真提供：株式会社三井住友銀行）

制作協力番組のご案内（制作：株式会社オプテージ）

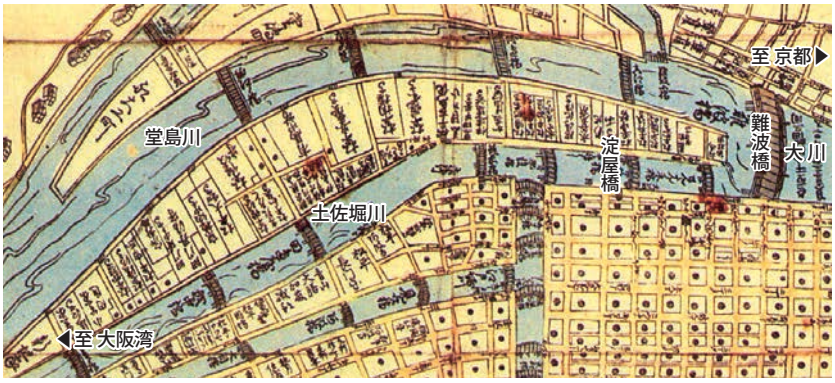
村瀬先生の「ぶらり歴史歩き」 大阪・中之島編

「なにわの地理博士」こと大手予備校・東進ハイスクールの人気講師・村瀬哲史さんの案内で、古地図を片手に大阪のまちの歴史や地理をご紹介するYouTube番組です。現在、当協会のホームページで「梅田編」「なんば編」「北浜編」「中之島編」「大阪城編」を公開中。その中から「中之島編（前編・後編）」の一部をご紹介します。

村瀬哲史さん

秋山未有さん

水晶橋（堂島川）からの中之島の眺め



江戸時代の中之島一帯（新撰増補大坂大絵図／大阪市立図書館デジタルアーカイブより）

江戸時代は全国の蔵屋敷が集中

中之島は川上から運ばれてきた土砂が堆積し、自然にできた中洲地帯でした。京都（上流）と大阪湾（下流）をつなぐ舟運の便の良さから、江戸時代には全国各藩の蔵屋敷が建ち並び、各々がその前に自慢の松を植えて景観を競いました。

中之嶋蛸の松（写真浪花百景 上編 中編／大阪市立図書館デジタルアーカイブより）

慶長年間（1596～1615）に広島藩蔵屋敷の前にあった「蛸の松（二代目）」（渡辺橋駅近くの田蓑橋）

ヘレン・ケラーも講演

実業家・岩本栄之助が私財100万円（現在の50億円相当）を投じて大正7（1918）年に竣工した大阪市中央公会堂。1世紀にわたり著名人の講演会やコンサートなどを開催し、大阪の文化・芸術の発展に貢献しています。かつての貴賓室（特別室）は有料で使用でき、ドラマの撮影や挙式などに活用されています。

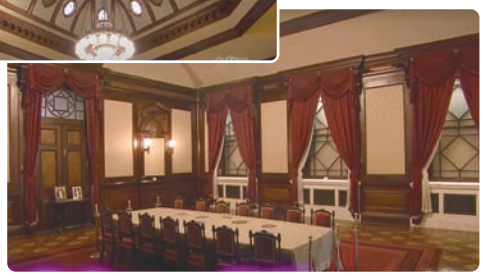
大阪市中央公会堂と特別室（国指定重要文化財）

ドームの真下に何がある？

日本銀行大阪支店のドームの真下にあるのは、かつて歴代の支店長がお客様を迎えるために使用していた貴賓室（現在は記念室）。壁面の彫刻やステンドグラス、大理石のマントルピースなど、明治時代の内装がそのまま残されています。

日本銀行大阪支店

記念室の天井


記念室内部

番組でチェック！

- ■**大正時代の椅子に意外な仕掛け（大阪市中央公会堂）**前編
- ■**「オムライス」が必ずある理由（大阪市中央公会堂）**前編
- ■**空襲から建物を守るための工夫（日本銀行大阪支店）**後編
- ■**取引後、人々は水を撒かれて退散!?（堂島米市場跡）**後編

右記のQRコードを読み込むか、当協会ホームページにアクセスしてご覧ください。
https://www.osaka21.or.jp/

前編　後編

村瀬哲史（むらせ あきふみ）▶東進ハイスクール東進衛生予備校 地理講師
「楽しく学ぶ地理」をモットーとした授業で学生に大好評。
一度観ると忘れられない！そんなキャラクターでテレビ・ラジオでも活躍中！

日本の文化に親しむ

花の集い

華やかな情緒を心ゆくまで 歌舞伎と日本舞踊の競演

当協会の上方文化芸能運営委員会は今年２月、「日本の文化に親しむ『花の集い』」を開催しました。前身の財団法人 上方文化芸能協会時代から約40年にわたり上方文化の伝承と振興に尽力してきた同委員会は、今年度で幕を下ろします。三部構成による歌舞伎と日本舞踊の競演は、その最後を飾るにふさわしい華々しい公演となりました。

2023年２月８日／国立文楽劇場
企画：阪口 純久
構成・振付：藤間 勘十郎
撮影：©越田 悟全

第一部 手打『七福神と花づくし』

▲京都祇園甲部芸妓の皆さん

江戸時代、京都・四条河原の芝居小屋のあたりに発祥した祇園新地で、芸妓衆が顔見世に来る役者たちを迎える際に手打を行ったことが始まりです。現在、芸妓たちが演じる「手打」は、明治時代に市川團十郎が京都で出演した際に行われたもの。揃いの黒紋付に、笹りんどうの紋の手拭いを小さく畳んで頭にのせた芸妓たちが、紫檀の拍子木をリズミカルに打ち鳴らしながら登場。その音頭によって、舞台上で三味線や笛、太鼓にあわせた唄や褒めことばで場を盛り上げます。

今回は京都祇園甲部のスター芸妓が勢ぞろいし、一斉に打たれた拍子木の響きは、賑々しく絢爛、かつ古風で雅やかでした。昔の京の顔見世の賑わいを彷彿とさせる出し物となりました。

第二部 長唄囃子連中『高杯（たかつき）』

◀松本幸四郎さん（次郎冠者）

高杯とは、盃をのせる脚付きの台。花見に出かけた次郎冠者は、主人から高杯を買ってくるよう命じられましたが、高杯がどのようなものかを知りません。困った次郎冠者は「高杯買いましょう」と声を張り上げて歩き始めます。そこへ高足売り（高下駄を売る行商人）が現れ、言葉巧みにだまし下駄を売りつけるところが観客の笑いを誘いました。

初演は昭和８年、六代目尾上菊五郎が当時流行していたタップダンスの技法を取り入れ演じたもの。下駄でタップという趣向が楽しく、酔っ払って転げそうになりながらも巧みに下駄を操り、拍子を取って踊るさまは絶妙で最大の見せ場となりました。

第三部　極付 歌舞伎絵巻

『三番叟』

五穀豊穣を祈る日本古来の伝統芸能である三番叟を、二人で対をなしシンクロさせる楽しい舞踊。千歳の藤間勘十郎が息を合わせ、場を盛り上げました。

▲藤間勘十郎さん（右）と渡邊愛子さん（左）

▲左から、泉葵三照さん、坂東はつ花さん、藤間勘松音さん、花柳凛さん、若柳杏子さん

『阿国歌舞伎』

江戸時代、出雲大社の巫女出身といわれる阿国が京都で始めた舞踊劇。のちの歌舞伎芝居の始祖とされています。花びら舞い散る中、艶やかな五人衆が登場し、華やかな舞を披露しました。

▲山村光さん

『雪』

谷崎潤一郎の「細雪」にも描かれる地唄舞「雪」。銀屏風と燭台を座敷に設え、光量を抑えた舞台。和蠟燭の灯りがほのかに絹張りの傘より透けるのも趣を添えて幻想的でした。山村流の魂と舞手によって伝えられてきた静かな舞に、上方の魂を見る思いがしました。

▲松本幸四郎さん

『蜘蛛の糸』

能の『土蜘蛛』を元に書いた舞踊劇。源頼光にとりつき殺そうとする蜘蛛の精が狂言師に化けて現れ、三つの面での早変わりで惑わします。この素早い変化が見せ場となり、大きな拍手が沸き起こりました。そして、頼光と碓井貞光はこれを退治しようとしますが、蜘蛛の精は千筋の糸を繰り出し攻撃します。最後は平井保昌も加わり、蜘蛛と武者たちが歌舞伎らしい豪快な大立ち回りで観客を魅了しました。

▼松本幸四郎さん（中央）、中村虎之介さん（右）、中村歌之助さん（左）

▲尾上右近さん

日本万国博覧会記念基金事業

世界各国で助成が生かされています。

過去50年間に日本万国博覧会記念基金の助成を活用して建設された海外の施設についてご紹介します。

＜第４回＞

カウラ日本庭園＆文化センター（オーストラリア）

カウラ日本庭園＆文化センターは、シドニーの西320kmのカウラ市にある約５haの面積を有する南半球最大規模の日本庭園です。万博記念基金では、過去に日本庭園＆文化センターの建設や改修、催しの実施に際して助成をしてきました。現在、同施設の管理をしているマネージャーのマーガレット・デビッドソン（Margaret Davidson）さんに、カウラ日本庭園＆文化センターについてご紹介いただきました。

助成年度	助成事業名	助成事業者	金　額
1976年度	「日本文化センター・日本庭園」の建設	カウラ観光開発公社	19,346,250円
1985年度	日本庭園の整備・施設の建設	カウラ観光振興協会	30,000,000円
1992年度	カウラ日本庭園桜並木街道への給水事業	カウラ観光振興協会	10,692,638円
2022年度	東西のハーモニー：オーストラリアの日本庭園ストーリー	カウラ日本庭園文化センター	1,500,000円

1979年に開園したカウラ日本庭園は、12.5エーカー（約５ha）の面積を有する南半球最大の日本庭園です。

世界にはたくさんの日本庭園がありますが、カウラ日本庭園は単なる庭園ではありません。日本とオーストラリアの友情と共感の象徴であり、両国の相互理解と平和を促しています。また、オーストラリアにおける日本文化の拠点となっています。

庭園と茶室

カウラと日本の関係は、1944年に1,000人を超える日本人捕虜がカウラ捕虜収容所から脱走したときに始まりました。脱走で亡くなった日本人はカウラの墓地に埋葬され、日本とオーストラリアの両国で協力して手入れされています。この事件から、日本とカウラとの相互の尊敬と友情が育まれ、この友情の象徴として日本庭園が建設されました。

庭園の渓流

庭園は、世界各国で日本庭園を作庭している中島健氏の設計で、江戸時代の庭園設計の原則に基づいた回遊式庭園となっており、丘の上の岩は日本の山を表し、岩から流れ出る水は渓流を表しています。上の湖は内水、下流は川、下の湖は海です。湾曲した生け垣は日本のなだらかな丘陵を象徴し、草木は日本の植物です。園内にある露天茶屋などの建物は、日本の町村を象徴するもので、伝統的な江戸時代の様式で建てられています。また、自然の地形を取り入れた「借景」という技法を用いており、庭からカウラの風景を眺めることができ、地元の植物や岩などを庭園に取り入れて、他の庭園とは異なる独特の環境を作り出しています。

庭園から眺めたカウラの風景

桜祭りでの太鼓演奏

庭園に併設された文化センターには、陶磁器、金属細工、木彫り、建築模型、絵画、巻物、漆器、織物、伝統的な人形など、日本の美術品や工芸品の重要なコレクションがあります。

現在、カウラ日本庭園＆文化センターには年間５万人ほどの来場者があり、春には桜祭り、秋には紅葉祭りなど季節ごとのイベントや茶道、伝統舞踊、相撲、刀剣、生け花、盆栽などの日本文化を紹介するイベントを実施しています。

オーストラリアを訪れる際は、カウラ日本庭園＆文化センターを訪れて、この特別な場所をお楽しみください。

裏千家による茶道の紹介

（写真提供：Cowra Japanese Garden & Cultural Centre）

2022年度 EXPO'70スカラーシップ
奨学生による中間報告会を開催

2月8日／難波御堂筋ホール

日本文化に関する多彩なテーマを対面で発表

「EXPO'70スカラーシップ」を活用して、それぞれが目標に掲げた研究テーマを追究する外国人留学生（奨学生）たちが、これまでの学業生活で学んだこと、調査したこと、制作したことについて中間報告を行いました。

関西・大阪21世紀協会は、奨学生が自らの研究テーマを深掘りすることを目的に、年に２回程度の報告会を計画していました。しかし、今般のコロナ禍により実施が延期され、今回初めて、2022年度奨学生４名と審査委員３名、当協会スタッフが会場に集い対面での報告会が実現。染色、映像制作、ポップカルチャーの特質、敬老・長寿を祝うなど、日本文化に関する多彩なテーマが発表され、審査委員各氏から専門的見地での質疑や、さらなる研究に向けたアドバイスが出されました。奨学生同士にとっても、対面で交流できる貴重な経験となりました。

その後、奨学生たちは国立文楽劇場にて上方歌舞伎と伝統舞踊を鑑賞し、日本の文化に親しみました。

關（クァン） 正玟（チェンウェン）さん

京都市立芸術大学
大学院美術研究科

研究テーマ
日本と台湾両国に共通の「染める」文化について

徐（ジョ） 逸文（イツブン）さん

京都市立芸術大学
大学院美術研究科

研究テーマ
映画と精神分析の関連性について

張（チョウ） 子萌（シモウ）さん

大阪大学大学院
人文学研究科

研究テーマ
日本のアニメ映画における日本文化の特質 －『君の名は。』を例として－

馮（ヒョウ） 辰鋮（チェンチェン）さん

早稲田大学大学院
文学研究科

研究テーマ
日本における尚歯会（しょうしかい）と九相観（くそうかん）享受の実態

左から張 子萌さん、關 正玟さん、馮 辰鋮さん、
徐 逸文さん（国立文楽劇場にて）

助成先の事業紹介

2022年度助成事業の中から、事業者より寄せられた報告をご紹介します。

2022 AT ARTS EXHIBITION 浄厳院アーティスト in レジデンス・浄厳院現代美術展

事 業 者：AT ARTS
助成金額：100万円
実施期間：2022年８月25日～11月７日
実施場所：金勝山浄厳院
（滋賀県近江八幡市安土町慈恩寺744）

オープニングセレモニー 西アフリカ
セネガル サバールダンス（９月４日）

８月25日からウクライナ・ポーランド・韓国の５人のアーティストを滋賀県安土に招待し、戦国の世に国際交流を夢見た織田信長が創建した浄厳院でアーティストinレジデンスを行いました。10月22日～11月６日には現代美術展を行い、『場』をテーマに国内外の作家26名が境内や建物の中に作品を展示しました。壮大な寺院で文化遺産と現代美術が共に引き立て合う展示となり、ワークショップ、パフォーマンス、トークショーを、11回延べ13組で開催しました。イベントと展覧会を合わせて、参加者数は延べ1,176名でした。ウクライナ人のルイーザさんは、『あす、すべてが終わってしまう前に、ウクライナ画家が描く風景』とした作品をNHKで何度も取り上げられ、地元の小学校２校の平和学習にも招待されました。

インスタレーション 奥田誠一

パフォーマンス 舞踏＆ライブ音楽
桂勘とArts Flying Pan（11月３日）

コロナ以来の国交再開にあわせた交流事業で、ビザの獲得費用や旅費の高騰においても、万博基金の助成を心強く感じました。

2022 スイス・パリ雅楽公演

事 業 者：公益社団法人北之台雅楽アンサンブル
助成金額：270万円
実施期間：2022年９月19日～10月３日
実施場所：9/22 スイス連邦工科大学ワークショップ
（チューリッヒ、126名参加）
9/23 チューリッヒ音楽院公演
（チューリッヒ、250名参加）
9/24 在スイス日本国大使館ワークショップ
（ベルン、50名参加）
9/26 フランク・マルタン公演
（ジュネーブ、300名参加）
9/30・10/1 パリ日本文化会館公演
（パリ、２日で423名参加）

本事業は、1970年大阪万博の理念ならびにSDGs理念（持続的開発目標）を基調とし、千数百年の悠久の歴史を経て現代も息づいている「雅楽」を紹介するものです。

浦安の舞

管絃

元宮内庁楽部首席楽長・安齋省吾師（横笛）に特別出演していただき、二部構成の公演としました。第一部は、平安時代に隆盛した歌謡の一つである催馬楽『更衣（ころもがえ）』を唱和。続いて、祝賀の曲『越殿楽（えてんらく）』および梵語に由来し仏誕会に奏される『陪臚（ばいろ）』の管絃曲を演奏しました。

第二部は舞楽。天皇即位の大礼で舞われる四人舞『萬歳楽（まんざいらく）』、龍頭を模した仮面を被る勇壮な走舞『陵王』、そして、十二単に身を包んだ舞人が気高く平和を祈る神楽舞『浦安の舞』を披露しました。最後は、声楽家・ひなたおさむ氏による『越殿楽今様（えてんらくいまよう）』『君が代』の歌で花を添え、どの会場でも万雷の拍手をいただきました。

来場者からは、雅楽の繊細さ、日本の美意識、質の高い芸術性といった高評価が寄せられ、現地各主催団体からは次回の公演を切望されました。

万博基金のご厚情の賜物と衷心より御礼申し上げます。

HLAB TOKYO 2022 サマースクール

事 業 者：一般社団法人 HLAB
助成金額：270万円
実施期間：2022年８月15日～23日
実施場所：東京都渋谷区（恵比寿ガーデンプレイス）、港区（六本木アカデミーヒルズ）、台東区（浅草エリア）の施設およびフィールド（宿泊地：タカオネ〈東京都八王子市〉）

８日間の宿泊型リベラルアーツ教育プログラムとして、HLAB TOKYO 2022サマースクールを開催しました。2020・2021年度はCOVID-19の影響により、宿泊型での実施ができなかったため、３年ぶりの対面開催となり、75名の高校生と29名の日本人大学生、20名の海外大学生（９カ国）が寝食をともにしながら学びました。

参加した高校生は、海外の大学生による英語での少人数ゼミ形式の授業を通じて、学びと探究の面白さに触れました。講演会には「若者が声を届け、その声が響く社会をつくる」をビジョンとして活動する団体の理事である能篠桃子さんをお招きし、政治参加をテーマにお話しいただく中で、社会のためにどう行動するかを考えました。また、日本舞踊家 孝藤右近先生による盆踊りのワークショップも行い、日本とはルーツが異なる人々も一緒に日本の文化を体感し、考える機会となりました。

今回いただきました助成金を、タカオネでの宿泊や、サマースクール当日のフィールドワークへの旅費、高校生に手渡すパンフレットの制作費用などに使わせていただき、私たちの大切にする「寝食をともにする」を改めて実現する上で大変大きなサポートとなっただけでなく、東京というフィールドの強みを生かした有意義なプログラムを十分に実現することができました。

「共に生きる」をめざす日米演劇協働 じゆう劇場の挑戦

事 業 者：特定非営利活動法人 鳥の劇場
助成金額：238万円９千円
実施期間：2022年９月６日～27日
実施場所：鳥の劇場（鳥取県鳥取市鹿野町）

本事業では、二つの作品上演と上演作品にまつわるトークや対談といった関連事業を実施、両事業合わせて延べ364名の方にご来場いただきました。

上演作品は、ニューヨークのオフブロードウェイで活動し、障がいのある俳優も所属する劇団「TBTB（THEATER BREAKING THROUGH BARRIERS）」の作品と、TBTBが短期滞在し、じゆう劇場（鳥の劇場がプロデュースする、障がいのある人とない人が一緒に演劇作品を創作する劇団）とともに、新たに共同制作した作品です。

共同制作作品の中で、出演者が日本語と英語でコミュニケーションし、最後に人と人をつなぐのは「愛」だという結論に達するのですが、これは文脈が違えば、予定調和的で陳腐に見えたかもしれません。しかし、舞台上での彼らの真摯な内面の吐露を通じて至る結論としての「愛」は、観客にとって深く胸に迫るものがありました。これは本事業の大きな成果の一つであると感じております。

第14回宇宙空間シミュレーション国際学校

事 業 者：第14回宇宙空間シミュレーション国際学校実行委員会
助成金額：56万９千円
実施期間：2022年９月12日～17日
実施場所：完全オンライン

本事業は、地球を取り巻く宇宙空間の定量的理解に非常に有効な研究手段である計算機シミュレーションに特化した国際学校です。1981年に京都で第１回が開催された後、日欧米の間で場所および運営を交代しながら継続的に開催され、2022年９月には日本担当により第14回を完全オンライン形式で実施しました。

全体で167名の参加があり、そのうち119名は海外からの参加でした。参加国はアジア、欧州、北米、オセアニアの26か国にわたり、国際的なスクールの開催となりました。

９名の国内外の講師がZOOMを使って宇宙空間シミュレーションのさまざまな手法に関する講義を行い、参加者はオンラインで各講義を熱心に受講し質問応答も活発に行われました。また、オンラインポスターセッションを開催し、30件ほどのポスター論文の発表、議論が行われました。

参加者間のコミュニケーションが取りにくいオンラインでの開催となりましたが、本事業がきっかけとなり、参加した若手研究者や大学院生が本格的に宇宙空間シミュレーションに取り組み、宇宙空間物理現象の解明や、月などで人類活動が盛んになる宇宙環境評価など、さまざまな研究成果の創出につながることが期待できます。

ウィズコロナ時代において、アーティストたちはさまざまな芸術活動に挑戦しています。みなさまからの寄付で行われているその活動の一部をご紹介します。

アーツサポート関西（ASK）が支援した活動のご紹介

企画協力▶美術

クロスホテル大阪とのコラボレーションで２つの現代美術展が開催されました

ASKの企画協力による展覧会「Nice to Meet Art 2022」が、2022年７～８月、大阪ミナミのクロスホテル大阪で２期に分けて開催されました。

第１期の『the Cityscape』（７月14日～８月３日）は、アーティストの森村誠さんの個展。DMなどに印刷された小さな地図を切り抜き、大量に集め、糸を使って布の上に縫い合わせていくマップの「刺繍」作品です。針と糸で編まれる都市の広がりが、見る人の脳内に広がる都市のイメージとつながります。

第２期の『庭の音／garden notes』（８月７日～21日）は、アーティストの小出麻代さんと山本理恵子さんの二人展。小出さんは、作品への視点を移動させたり光を反射させたりして鑑賞者の意識をずらし、山本さんは抽象と具象を自由自在に行き来する絵画を展示しました。また、二人の共同作品《LETTERS》は、手紙を交わすように二人が布の端切れをやりとりし、少しずつ縫い足しながら作っていった布の作品です。10回以上におよぶ「対話」で生まれた作品には、独特な造形感覚がただよう不思議な魅力が感じられました。

『庭の音／garden notes』会場風景
小出麻代・山本理恵子
場所：クロスホテル大阪

クラウドファンディング助成▶美術

３名の現代美術家による『Positionalities』展が京都で開催されました

現代美術アーティストの金光男さん、山田周平さん、東恩納裕一さんの企画・参加による展覧会『Positionalities』が、2022年７月30日～８月28日、京都市立芸術大学が運営するGallery＠KCUA（ギャラリーアクア／京都市中京区）で開催されました。

Positionalities（ポジショナリティーズ）という言葉は、英語で「さまざまな立場」を意味します。作家は自身の活動や作品を通して世界と関わる際、それぞれが異なる「立場」をとります。社会を見る視点の違い、扱うテーマの表現の違い、絵画か映像かといった作品の様態の違いなど、その立場はさまざまです。本展は、ほぼ同じように見える巨大な絵画作品をあえてシンプルに連続して壁に掛けて展示するなど、なるべくありのままの状態で作品を見せることで、鑑賞者に自らの「立場」を展示から感じ取ってほしい、そんなメッセージが込められているように感じました。

この展覧会には企画の内容を統括するキュレーターとして、今、日本の現代美術界で注目を集める気鋭の美術評論家・山本浩貴氏が関わったことでも話題となりました。本展は、クラウドファンディング型の助成となり、ASKのホームページ上で75万円の寄付を集めて実施されました。

『Positionalities』会場風景　金光男・山田周平・東恩納裕一
場所：Gallery@KCUA　撮影：来田猛　写真提供：京都市立芸術大学

一般公募助成▶舞台芸術

演劇ユニットiakuによる『あつい胸さわぎ』が東京と大阪で上演されました

大阪出身の劇作家・横山拓也さんが主宰する演劇ユニットiaku（イアク）の公演『あつい胸さわぎ』が、2022年８月４日～14日に東京のザ・スズナリ、８月18日～22日に大阪のインディペンデントシアター2ndで開催されました。

『あつい胸さわぎ』公演より　iaku
場所：ザ・スズナリ　撮影：井手勇貴

横山さんは、現代の社会問題を正面から取り扱う劇作で注目を集める存在。『あつい胸さわぎ』は、若い女性がかかる若年性乳がんをテーマにした作品で、2019年に初演され好評を博し、今回、会場の規模を拡大して東京と大阪で再演となりました。

小説家を夢見て大学の文学部に通う主人公の娘と、ひとり親で彼女を育てあげた明るく元気な母。２人は時にはささいなことで言い争い、時にはお互いを優しく思いやる大阪のどこにでもいる母と娘。しかし突然、娘に乳がんの診断が下り、２人の周囲の世界は一変します。緻密に練り上げられた会話のリアリティや複雑に交錯する人と人との関係性が、物語の進行に厚みを加えていきます。

この作品は各方面から高く評価されて話題となり、女優の常盤貴子さんが母役を演じる形で映画化が決定。2023年１月に全国で公開されました。

未来アート寄金助成▶コンテンポラリーダンス

コンテンポラリーダンサー・高野裕子さんによるダンス公演『home』

関西を拠点に活動するコンテンポラリーダンサー・高野裕子さんが、2022年８月27、28の両日、大阪府池田市のカフェ・GULI GULIで『home』を上演しました。

高野さんは神戸女学院大学で舞踊を学んだ後、2010年にドイツに渡りダンサーとして活躍。帰国後は、地元の兵庫県西宮市を拠点に、さまざまなユニットにかかわりながらダンサーとして活動する一方、大阪府や西宮市の小学校と共同で子どもたちにダンスの学びに触れてもらう取り組みにも積極的にたずさわっています。

公演は、外気にまだ太陽の熱気が感じられる８月の夕方６時にスタート。ガラス窓越しに見える夕暮れ間近の日の光にあわせるかのように、４名のダンサーが、ときには空気に触れ、外部の音をとりこみながら、「耳をすます」「たたずむ」「待つ」といった単純な動作を繰り返します。やがて身体の動きは静かに収束していき、最後に、わずかに灯るダウンライトに照らされた１人のダンサーが吐露する「ただいま」のひとことで、観客はhomeの夢想からふっと目を覚します。

『home』公演より
場所：GULI GULI　撮影：高橋拓人

あえて小さな空間で、観客と親密な空間を分かち合うことで生まれる表現の意味。そんな芸術の１つのあり方をしっかりと感じさせてくれる公演でした。

クラウドファンディング助成▶伝統芸能

能楽師 山本章弘さんと指揮者 ケント・ナガノさんによる共演『The Spirit of the Moon』

世界的な指揮者ケント・ナガノさんと、観世流能楽師・山本章弘さんが「月」をテーマに能舞台で共演する『The Spirit of the Moon』。2022年９月12日、この奇跡ともいうべきコラボレーションが山本能楽堂（大阪市中央区）で実現しました。

オペラや現代音楽の指揮で極めて高い評価を得る日系アメリカ人３世のナガノさんは、長年、日本の幽玄なる美・能楽とのコラボレーションを構想しており、この度、海外でも能楽公演を行う山本さんに声をかけ実現しました。

『The Spirit of the Moon』公演より　場所：山本能楽堂　撮影：面高真琴

この日のために１年以上にわたり準備を進めてきた舞台では、ナガノさんが芸術監督をつとめるハンブルク・フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる室内楽と、世界的なメゾソプラノ歌手として知られる藤村実穂子さんが、ナガノさんの指揮でシェーンベルグの奇想の名曲『月に憑かれたピエロ』を演奏。それに対し山本さんは、今昔物語に出てくる、自らの身を食料として差し出すために火に飛び込んで自らを犠牲にしたうさぎの物語を新作能として創作し、演じました。

和と洋が幻想的な月のイメージのもとで出会い、能舞台の上で響きあった一夜限りのパフォーマンスは、まさに静かな秋の月夜に起こった「衝撃」。その場にいた観客はもちろん、オンライン配信で観劇した多くの人々を魅了しました。

一般公募助成▶舞台芸術

8.22企画による『さくらんぼ畑』がTheater E9 Kyotoで上演されました

俳優・杉江美生さんが主宰する8.22企画によるチェーホフ原作『さくらんぼ畑』が、2022年10月28日～30日、Theater E9 Kyoto（京都市南区）で上演されました。『さくらんぼ畑』は、チェーホフの有名な戯曲『桜の園』の新訳として上演されたもので、定番の戯曲に新しい光を当てる試みとしても注目されました。杉江さんは、ニューヨークで演劇メソッド（チェーホフ・テクニック）を学び、俳優が演技する技量の重要性を感じていたということで、今回はオーディションで選ばれた幅広いバックグラウンドをもつ俳優が役を担い、チェーホフ・テクニックを取り入れた稽古を行って公演にのぞみました。

物語の舞台は革命前夜のロシア。社会が多くの矛盾を抱えて大きく動こうとする中、過去の栄光にすがり、社会の荒波にもまれて没落していく貴族の姿が描かれます。

舞台のセットは、色彩をおさえたシンプルなものでありながら、力強い美しさが漂い、重苦しい歴史の存在が浮かび上がります。俳優の演技は、発声および身体の使い方ともに、明瞭で強い表現性があり、そこに演劇メソッドの成果が見て取れるように思いました。俳優によって「生」で演じられる演劇の魅力と醍醐味が存分に伝わってくる舞台となりました。

『さくらんぼ畑』公演より
場所：Theater E9 Kyoto　撮影：村上信六

関西・大阪21世紀協会は、「助成と顕彰」、「関西・大阪ブランドの発信と発掘」、「伝統の進化と創造」の３つを事業の柱としています。この趣旨に基づき、各団体開催の協力や後援も行っています。

『そうだ文楽に行こう!! ワンコイン文楽』（2022年11月、2023年1月／国立文楽劇場）

アーツサポート関西「コクヨ文楽支援寄金」助成　◆主催：公益財団法人 文楽協会

コクヨ株式会社の支援で第４期を開催

国立文楽劇場での公演を関西在住の15～35歳の人であれば誰でもワンコイン（500円）で鑑賞できる〝ワンコイン文楽〟。この企画は、大阪発祥のユネスコ無形文化遺産「人形浄瑠璃文楽」を若い人たちに楽しんでもらい、その伝統を受け継いでもらいたいとの思いから、アーツサポート関西が2014年に「京阪神ビルディング文楽支援寄金」を設けてスタートしました。以来、岩谷産業株式会社（2016～2017年）、丸一鋼管株式会社（2018～2019年）へと支援が引き継がれ、延べ3,000名を超える若者が文楽公演を体験。コロナ禍による中断を経て、今回はコクヨ株式会社（2022年～2023年）の支援寄金により、３年ぶりに第４期が開催されました。

アーツサポート関西「コクヨ文楽支援寄金」の目録を手渡す黒田章裕コクヨ株式会社会長（左から3人目）（2022年10月17日国立文楽劇場「ワンコイン文楽2022」記者発表にて）

2022年10月に行われた記者発表で、『勧進帳』の弁慶（人形遣い・吉田玉助さん）に助成金目録を手渡したコクヨの黒田章裕会長は、「日頃から豊竹咲太夫さんと親交があり、講演にお招きしたり、文化芸術について語り合ったりする機会をいただいている。寄金設立にあたり、改めて東京の国立劇場で文楽を鑑賞し、さらに親しみを感じた。若い人たちの鑑賞機会を増やす企画に参加させていただき感謝している」と語りました。また、竹本織太夫さん（写真右端）は「ワンコイン文楽のお客さまはほとんどが女性。文楽ファンになった女子学生が大道具のインターンになり、文楽の舞台スタッフの仕事に就いた例もある。未来のお客さまだけではなく、技芸員を育てる種まきにもなる」と期待しました。

関西・大阪21世紀協会の﨑元利樹理事長は、参加者からの「初めて鑑賞して面白かった」「また観に来たい」という感想を紹介し、「今後も文楽の裾野をどんどん広げていくことに貢献したい」と述べました。

ワンコイン文楽では、観劇前に技芸員が文楽人形の仕組みや見どころを解説する事前レクチャーもあり、参加者から「文楽への興味が一層深まった」と好評です。今年１月10日には、大阪、京都、兵庫、奈良の各地から、18～35歳まで大学生15名を含む24名が参加。人形遣いの桐竹勘十郎さんが、人形を主遣い、左遣い、足遣いの３人で遣うようになった経緯や、３人の息の合わせ方、首（かしら）や手足の動かし方などを説明しました。

その後、参加者は初春文楽公演『傾城恋飛脚（けいせいこいびきゃく） 新口村（にのくちむら）の段』『壇浦兜軍記（だんのうらかぶとぐんき） 阿古屋琴責（あこやことせめ）の段』を鑑賞。「人間国宝の桐竹勘十郎さんから直々にレクチャーしてもらえるとは思わなかった」「事前に観るポイントを教えていただいて、より楽しむことができた」「500円で観られるお得さにびっくり」などの感想が寄せられました。

桐竹勘十郎さんが『艶容女舞衣（はですがたおんなまいぎぬ）』のお園（その）人形を用いて動かし方を解説（事前レクチャーにて）

『壇浦兜軍記 阿古屋琴責の段』の一幕

平景清（たいらのかげきよ）の潜伏先を探るため、源氏方で景清を憎む岩永左衛門（いわながさえもん）を抑え、秩父庄司重忠（ちちぶのしょうじしげただ）が阿古屋を情と理で責める。重忠は阿古屋に琴、三味線、胡弓を演奏させ、その音色の乱れから景清の行方を知っているか探ろうとする。（公演チラシより抜粋）

（写真提供：国立文楽劇場）

第８回上方落語若手噺家グランプリ2022決勝戦 （2022年８月23日／天満天神繁昌亭）

アーツサポート関西「寺田千代乃上方落語若手噺家支援寄金」助成　◆主催：公益社団法人　上方落語協会

笑福亭生寿（せいじゅ）さんがグランプリを獲得

アーツサポート関西が2015年から毎年支援している上方若手噺家の登竜門「上方落語若手噺家グランプリ」。第８回となる今回は、入門４年目から18年目の40名がエントリーし、予選を勝ち抜いた８名（桂そうばさん、笑福亭生寿さん、露の紫さん、月亭大遊さん、桂二葉さん、桂三実さん、笑福亭智丸さん、桂りょうばさん）で決勝戦が行われました。超満員の天満天神繁昌亭（大阪市北区）で、同世代の噺家の頂点を目指して熱演の結果、入門15年目の笑福亭生寿さんがグランプリ（優勝）に輝きました。審査は在阪のテレビ・ラジオ局のプロデューサーらが務めました。

生寿さんは1983年奈良県出身で、2007年に笑福亭生喬さんに入門。宝塚歌劇の大ファンで、古典落語の『天王寺詣り』や『蔵丁稚』などの演目をタカラヅカ仕立てで演じることができます。決勝戦の演目は古典『秋刀魚芝居』。晩飯に秋刀魚をたらふく食べて芝居見物に行った男二人が、花火を切らして仕方なく秋刀魚を焼く煙で登場させられた幽霊役を野次る滑稽話で、芸の深さと完成度が高く評価されました。生寿さんは受賞後のインタビューで、「上方落語は江戸に負けない独特の面白さがある。その魅力をもっとアピールしていきたい」と語り、観客席から大きな拍手が送られました。一方、２年連続で準優勝となった桂二葉さん（2011年入門）は、古典『がまの油』を口演。新作落語の勢いが強い中、古典落語の魅力をあらためて浮かび上がらせる形となりました。

毎年、決勝戦のチケットは売り出されるとすぐに完売します。この舞台にかける出場者の熱量と鍛錬は相当なもので、今回の決勝戦も、落語ファンの期待を裏切らない素晴らしい熱戦となりました。

左から笑福亭仁智さん（上方落語協会会長）、桂二葉さん、笑福亭生寿さん、寺田千代乃さん（アート引越センター株式会社名誉会長）
（2022年８月23日・授賞式にて）

日本万国博覧会記念公園シンポジウム2022 （2022年10月29日／国立民族学博物館）

◆主催：国立民族学博物館　◆共催：大阪府、公益財団法人　千里文化財団
◆協力：公益財団法人　関西・大阪21世紀協会

人類よ、どこへ行く？　ポストコロナの世界を占う

EXPO'70のレガシーである国立民族学博物館（大阪府吹田市）でシンポジウムが開催されました。全人類が同時に経験した新型コロナウイルス感染症の蔓延。この体験をもとに「分断からの回復」について、精神医療、医療、比較文学比較文化、哲学といった異なる分野の研究者が議論を交わしました。そして、さまざまな分野の人間が対話し、互いを尊重することの重要性が示され、「ポストコロナ」にとどまらない視座の得られたシンポジウムとなりました。

第20回堂島薬師堂節分お水汲み祭り （2023年２月３日／堂島薬師堂）

◆主催：堂島薬師堂節分お水汲み祭り実行委員会

早春の北新地で３年ぶりの賑わい

堂島・北新地に古くから伝わる「節分祭」と北新地の花街に伝わる「節分お化け（仮装）」、そして、大阪・キタの活性化と水都大阪の再生に向け関西経済同友会が提言した「お水汲み祭り」が一つになった「堂島薬師堂節分お水汲み祭り」。第20回となる今年は、新たに「白龍（堂島薬師堂の化身）」が登場し、コロナ禍で中断していた龍の巡行や特設舞台での薬師寺僧侶による声明（しょうみょう）、北新地芸妓衆の奉納舞、お化けなどが３年ぶりに実施され、疫病退散と商売繁盛を祈願する多くの人で賑わいました。

薬師寺僧侶による鬼の入魂式と沿道で見守る人々（堂島薬師堂にて）

令和４（2022）年度 関西元気文化圏賞 贈呈式 （2023年１月25日／リーガロイヤルホテル大阪）

◆主催：関西元気文化圏推進協議会

大阪中之島美術館に大賞を贈呈

文化・芸術・スポーツなどの分野で活躍し、関西から日本を元気に明るくした人や団体に、感謝と一層の活躍を期待して贈られる関西元気文化圏賞。第20回となる今回は、2022年２月に開館し11月には早くも50万人の来場者を達成した大阪中之島美術館に大賞が贈られました。また、2025年大阪・関西万博の話題作りに貢献した公式キャラクター「ミャクミャク」／山下浩平さんらに特別賞が贈られました。関西元気文化圏推進協議会の松本正義会長は「万博来場を機に関西のさまざまな魅力に触れていただけるよう、文化芸術・スポーツ・観光の側面から関西を盛り上げていきたい」と語りました。各賞の受賞者は次の通り。

大賞：大阪中之島美術館、**特別賞**：大阪・関西万博公式キャラクター「ミャクミャク」／山下浩平、公益財団法人鷹山保存会、生駒高等学校野球部・天理高等学校硬式野球部、オリックス・バファローズ、**ニューパワー賞**：桂二葉（上方噺家）、今村翔吾（小説家・書店経営者）（敬称略）

受賞者と主催者

Arts Support Kansai

HEART & ART

こちらから簡単に
寄付ができます

ウィズコロナ時代の芸術・文化支援

HEART＆ARTは、ウィズコロナ時代の芸術・文化支援のために寄付を集める取り組みです。お寄せいただいたご寄付は、アーティストや文化団体支援に充てられます。みなさまからのご寄付をお待ちしています。
寄付には税の優遇措置が適用されます。

HEART＆ARTは公益財団法人関西・大阪21世紀協会が行うアーツサポート関西の取り組みとして行われています。

詳しくはアーツサポート関西ホームページへ ▶ https://artssupport-kansai.or.jp/

スマホを使って文化芸術支援にご協力を！

2021年３月30日より、株式会社みずほ銀行が提供し、全国90以上の金融機関が参画するスマホ送金・決済アプリ「J-Coin Pay」内で実施している「ぽちっと募金」から、関西・大阪21世紀協会にご寄付いただくことが可能となりました。

当協会は、コロナ禍で経済的な事情を抱える若手アーティストへの支援や活動の場の提供を通じて個と個を結びつけ、さらには個と企業を繋ぎ合わせる取り組みを行っています。こうした取り組みにご賛同いただける方は、「ぽちっと募金」で500円からお気持ちの金額を当協会に寄付していただくことができます。ご寄付は、アーティストへの支援を拡充するための費用として活用させていただきます。

皆様のご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

詳しくは関西・大阪21世紀協会ホームページへ
https://www.osaka21.or.jp

「ぽちっと募金」とは

J-Coin Pay（店頭での支払い、送金、入出金をスマホで行えるアプリ）を利用して、復興支援や国際協力、医療・福祉、文化・芸術、スポーツ振興などの支援を行う団体に対し、少額から募金できるサービスです。（J-Coin Payについては▶https://j-coin.jp/）

関西・大阪21世紀協会賛助会員 入会のお願い

関西・大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会　費（何口からでも結構です）
■法人会員１口につき年会費10万円
■個人会員１口につき年会費　1万円

特　典
1. 協会が発行する刊行物の配布
2. 協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3. 賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ　（公財）関西・大阪21世紀協会　総務部（TEL.06-7507-2001）

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会
ホームページ https://www.osaka21.or.jp

発　行　日／令和5（2023）年 3月24日
編集・発行／公益財団法人 関西・大阪21世紀協会
〒530-6691 大阪市北区中之島6丁目2番27号 中之島センタービル29階 TEL.（06）7507-2001 FAX.（06）7507-5945
発　行　人／﨑元利樹　編集協力／株式会社インサイト　印刷／東洋紙業株式会社